



岩下講演に関連して—

論点・書評

殺傷力による防衛と市民力による「代替防衛」

豊島耕一(元佐賀大学理工学部・物理学)

自国の軍隊が防衛軍になるか侵略軍になるかの数学的確率は半々である

なぜ人は、またどの国の政府も、「攻められるかも知れない」という心配はさかんにするのに、逆に自分の国が外国を「攻めたらどうするのか」という心配は、なぜ全くと言っていいほどしないのだろうか？ 少し考えれば、いや、ほとんど考えなくても分かることだが、自分の国が他の国から攻められる確率と、逆に自国が他国を攻めてしまう確率は、「場合の数の確率」(先験的確率)としては全く等しい。(筆者はこれをわざわざ数式化して「証明」している(1)。「センター試験」の数学の問題にちょうどよいレベルである。)思うに、まわりに国がたくさんあって、自分の国は一つしかないのだから、なんとなく「攻められる」確率が高いように錯覚して、「攻められる」心配だけをするのかも知れない。

この等確率性を明確に意識すれば、もし国に「防衛」省を作り軍隊を持つならば、それは同時に50%の確率で侵略軍になるのであり(まさしく現在のロシア軍、そしてかつての日本軍)、それを同じウェイトで心配するならば、それが侵略軍になることを予防する「侵略軍化防止省」とでも言うものを作らなければならないはずだ。主流の防衛論議の中にも「安全保障のジレンマ」という、自国の軍拡の負の作用を表す言葉があるが、しかし自国の軍隊が侵略者になりうるというリスクまではほとんど意識されていないようだ(2)。

今から200年以上前、カントはその有名な著書「永遠平和のために」の中で、これとは別の理由で「常備軍そのものが先制攻撃の原因となる」と書いているが、結果的に同じことのようにも思える。

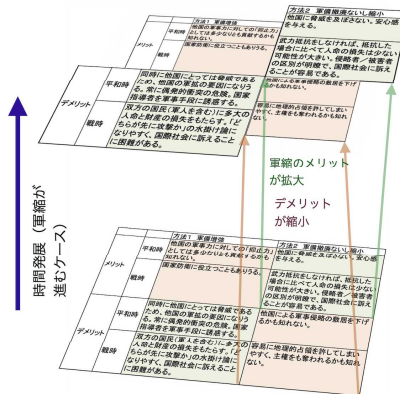
軍拡と軍縮、どちらが平和と主権を守るのか

次に、平和を保ち、かつ主権を侵されないようにするためには、軍備を拡大し

た方がよいのか、それとも軍縮・非武装のほうがよいのかと言う議論について考えてみよう。これを「逐条的に」議論すればほとんどエンドレスになるので、比較を公平にやるために一覧表方式を提案している。軍拡と軍縮のメリット・デメリット全部数え上げて、俯瞰して比べるのである。「防衛論議における量子コンピュータばりの並列処理」と誇大広告している。詳細は、この『九州から9条を活かす』シリーズの32号と34号に書いているので、そちらを参照いただきたい(3)。

		方法1 軍備増強	方法2 軍備撤廃ないし縮小
メリット	平時	他国の軍事力に対しての「抑止力」としては多少なりとも貢献するかも知れない。	他国に脅威を及ぼさない。安心感を与える。
	戦時	国家防衛に役立つこともありうる。	武力抵抗をしなければ、抵抗した場合に比べて人命の損失は少ない可能性が大きい。侵略者／被害者の区別が明瞭で、国際社会に訴えることが容易である。
デメリット	平時	同時に他国にとっては脅威であるため、他国の軍拡の要因になりうる。常に偶発的衝突の危険。国家指導者を軍事手段に誘惑する。	他国による軍事侵略の敷居を下げるかも知れない。
	戦時	双方の国民(軍人を含む)に多大の人命と財産の損失をもたらす。「どちらが先に攻撃か」の水掛け論になりやすく、国際社会に訴えることに困難がある。	容易に地理的占領を許してしまいやすく、主権をも奪われるかも知れない。

その表を眺めると「どっちもどっち」であり、平和を維持しかつ主権を守る万全の方法などは存在しないことが分かる。しかしこれに時間の次元も含めたらどうか、つまり時間発展を考えると、軍縮が進んでいくケースでは、この軍備縮小の方のメリット部分は拡大し、デメリットは減っていくことになり、好ましい循環に移っていける。軍拡ではその逆であり、どちらを選ぶべきかは自明であろう。



非武装のデメリットを補う

次に、この軍備撤廃・縮小を選択した場合のデメリット、つまり侵略されてしまうかもしれない、主権を奪われてしまうかもしれないというデメリットをなんとか無くす、ないし減らす方法はないだろうか。外交など事前の努力とは別に、文字どおり「攻められる」場合の対策についてである。実はもう50年以上も昔

から考えられている「代替防衛」という概念がある。実は、現在まさに「攻められた」状態のウクライナで、武力ではなく非暴力を訴えて、侵略に抵抗している勢力が実際にある。「ウクライナ平和主義者運動」というのがそれである。筆者がその活動の実態をよく知っているわけではないが、そのリーダー、シェリアジェンコ氏(4)がアメリカの「カウンターパンチ」というネットメディアのインタビューを受けた記事(5)で、「戦争が答えでないなら、ウクライナの人々はロシアの侵略にどう抵抗出来るか?」への応答のくだりにその考えのエッセンスが込められていると思う。

インドやオランダの非暴力抵抗が示したように、国民が占領軍に非協力を示すなど多様な方法で抵抗し、占領を無意味で重荷なものにすることができる。しかしこの問いは、次のような主要な質問の一部に過ぎない。それは、戦争における一方の側だけでなく、架空の「敵」でもなく、戦争システム全体にどのように抵抗するかということだ。なぜなら敵の悪魔的なイメージはすべて偽りで非現実的だからである。この問いに対する答えは、人々が平和を学び、実践し、平和の文化を発展させ、戦争や軍国主義について批判的に考え、ミンスク協定のような合意された平和の基礎にこだわり続ける必要があるということだ。(筆者訳)

今年1月にNHKEテレの「100分de名著」という番組が取り上げたのが、独裁体制を非暴力によって民主化する方法を説いたジーン・シャープの本である。中見真理氏によるその番組テキスト(6)には、国内の変革だけでなく外国の支配や侵略への抵抗にも触れた部分がある。それは、ソ連の支配下にあったリトアニアでの独立・民主化運動に、シャープの著作『市民力による防衛』の校正刷りによって、一九八九年に「非暴力闘争」理論が移植されたとある(67頁)。



時代を遡って、ナチス・ドイツに対する抵抗でも、デンマークは一九四〇年にドイツの侵略に対して軍事的手段ではなく、市民が非暴力的な抵抗を行なった。例えば、ナチスがユダヤ人を強制収容所に送る準備をしているといううわさが広まると、何千ものデンマーク人が近所のユダヤ人を自宅に匿い、スウェーデンに避難させる船に乗せた。それにより七千人以上のユダヤ人の命が救われたとのことである(7)。オランダでも同様に市民が非暴力で抵抗した。

戦後も、このような非暴力による国家防衛＝「代替防衛」についての研究が、上記の国を含むヨーロッパの数カ国で、国の支援も受けて行われている(8)。

もちろん、結果的には連合軍の武力によってヨーロッパはナチス・ドイツから解放されたのだが、これらの非暴力抵抗がなし得たことも決して小さくはないだろう。しかし人々の集団的記憶は主に、これらを伝える物語によって形成され、

その物語は主に戦争や戦場を扱う映画などであろうから、非暴力抵抗は過小評価されることになるのだろう。ほとんど唯一の例外は、スピルバーグの「シンドラの一のリスト」かも知れない。

いずれにせよ、武力であろうと非暴力であろうと、完全・万全な方法などないというのは、自然災害の場合と同じである。であれば、人命の損失が少なく、かつ将来の平和が展望できる方法を選ぶべきだろう。武力に武力で応じて、仮にその時は事なきを得たとしても、相手には不満が鬱積して将来に火種を持ち越すことになろう。つまり、それは単なる戦争の延期かも知れない。

- (1) 「日本の科学者」2005年1月号<読者の広場>に掲載，次に転載。
<https://pegasus1.blog.ss-blog.jp/2007-02-24>
- (2) 例えばウィキペディアの「安全保障のジレンマ」の項目参照（2023年7月閲覧）。
- (3) 次のブログ記事の一節にこれらをまとめて掲載している。
<https://pegasus1.blog.ss-blog.jp/2022-12-02#qcomputer>
- (4) 2022年の原水禁大会（原水協）でリモート講演，筆者ブログに全文転載。
<https://pegasus1.blog.ss-blog.jp/2023-06-27>
- (5) COUNTERPUNCH, JANUARY 19, 2023,
<https://www.counterpunch.org/2023/01/19/ukrainian-pacifist-movement-an-interview-with-yuri-i-sheliazhenko/> ブログに訳：<https://pegasus1.blog.ss-blog.jp/2023-06-05>
- (6) 中見真理「ジーン・シャープ 独裁体制から民主主義へ」，NHK出版，2022年12月。
- (7) E.チェノウェス「市民的抵抗」，白水社，2022年，p.289
- (8) M.ランドル「市民的抵抗」，新教出版社，2003年，5章

「非暴力で世界を変える-活動家という生き方」 (仮題) 出版します

原書：Angie Zelter, "Activism for Life", Luath Press (UK), 2021.

原作者

アンジー・ゼルター（英国 平和活動家）

2001年ライト・ライブリフッド賞（第二のノーベル賞）受賞

2023年8月中にクラウドファンディング開始予定

2023年12月頃 出版予定 出版社 南方新社（鹿児島）

CFサイト



ブログで

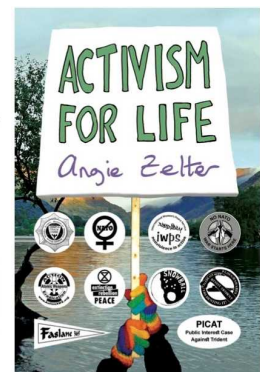
紹介→



インドネシアに輸出される戦闘機を破壊して無罪
原子力潜水艦の実験施設を破壊して無罪
非暴力に徹する活動家アンジー・ゼルター
ライト・ライブリフッド賞ほか、数々の賞に輝く女性の記録

アンジー・ゼルターは、人生の大半をアクティブな運動家として過ごしてきた。非暴力市民抵抗運動を企画、参加し、革新的で効果的なキャンペーンをいくつも立ち上げてきた。

彼女の抗議活動は、人権と他の生命体の権利を尊重しながら、地球資源を公平かつ持続的に共有する、核のない世界の実現のために行われてきた。地球市民として、彼女は世界中の運動との連帯を表明してきた。その結果、数多くの逮捕、出廷、投獄を経験した。



アンジーは、イギリスを中心に、ベルギー、カナダ、フランス、ドイツ、グランカナリア、オランダ、イスラエル/パレスチナ、マレーシア、ポーランド、韓国で約200回逮捕されている。彼女は合計で2年以上を、再拘留や刑期中の裁判を待つために刑務所で過ごしている。すべては非暴力抵抗の抗議活動。

数冊の本の著者である彼女は、1997年ショーン・マクブライド平和賞、2001年ライト・ライブリフッド賞、2014年プラント・ディンク賞を受賞している。企業、政府、軍による横暴に積極的に立ち向かい続けている。

「非暴力で世界を変える-活動家という生き方」翻訳刊行委員会
川島めぐみ（翻訳家）、豊島耕一（佐賀大学名誉教授） toyoshima@ta2.so-net.ne.jp
大津留公彦（プログラマー） kimihiko_ootsuru@yahoo.co.jp (08065406320)